

ズム史学の枠組に基づいているといえよう。ここに紹介するパウエル編『中世研究入門』は、それらとはやや異なったアメリカン・スタイルともいうべき形式・内容の入門書である。本書はアメリカの大学生及び若手の研究者のために編まれたものらしいが、英米の専門家一〇人による各分野のコンパクトな指針は、我國の西洋中世史研究者にとっても参考となる点が多いと思われる。

本書の章別は次のとおりである。一 ラテン古文字学、二 古文書学、三 古銭学、四 プロソポグラフィ、五 中世社会の統計的文書のコンピュータによる分析、六 中世年代学——理論と実際——、七 中世英文学、八 中世ラテン哲学、九 中世美術の伝統と革新、一〇 中世音楽展望。

第一、第二章では古文書学の手引きとして書体、文書の形式などの説明がなされ、中世記述史料を読むための基礎知識が与えられる。第三章では、史料としての貨幣の存在形態、また貨幣についてふれた記述史料の説明があったのち、古銭学の課題と方法が、貨幣の鑄造年代・場所、重量、品位、鑄造数、流通などの面から明らかにされる。章末では歴史学の補助科学としての古銭学

について述べられる。続く二つの章は近年の研究動向をふまえたもので、第四章ではプロソポグラフィ研究、系図学について、用いる史料とその処理方法、またプロソポグラフィ研究のもつ意義などが述べられている。第五章ではコンピュータのいわゆるハードウェアに関する簡単な説明ののち、対象によるコンピュータ利用の当否判定の基準が示され、最後にソフトウェア・プログラミングとデータ処理結果についても極めて簡単な案内がある。第六章は年代決定の基準となるいくつかの項目について説明している。原史料の日付の解読のための手引きである。第七——一〇章は文化史のそれぞれの分野について、主として書誌学的に道案内を試みたものであり、同時に現代における研究水準が示されている。各章の末尾には参考文献が詳しく挙げられており、大変便利である。

ここに挙げられた、古文書学、古銭学、系譜学、コンピュータ統計学、年代学などについて専門家たることは歴史研究者には困難であり、また日本における西洋史研究者たる我々は必ずしもこれらの専門家たる必要はないだろう。しかしこれらの補助科学が中世史研究に提供する成果を正しく理

解・摂取するためにも、それらの方法論を一応知っておくべきであろう。この意味で本書は西洋中世史研究者にとって有益であり、また補助科学の範囲をコンピュータにまで広げた、プラグマティックなアメリカ的歴史学研究入門書としても、一読に値すると思われる。

(三八九頁 一九七六年 New York, Syracuse University Press)

(井上浩一 大阪市立大学文学部助手)

リモジーン・ド・サン＝ディディエ著
有田忠郎訳

『沈黙の書・ヘルメス学の勝利』

「象徴とは……暗黙の書法体系なのである。文字を知らぬ人間にとって一切の書物は沈黙している。……したがって『沈黙の書』といえども一般の書物と同じで、解説の鍵さえあればきれいに読み解くことができる……」

一六七七年、ラ・ロシュエルで出版された十五葉の図版のみからなる『沈黙の書』*Mimus Liber* (作者不詳) を書物とよびう

る理由を、マゴフォンは右のように説明している。しばしば神話的で寓意的なヘルメス哲学—錬金術の語法には文字以上に圖像が適している。自然の内部に匿された火を動因とする自然界の溶解—昇華—凝固が、それをなぞって行なわれる術師のレトリック中の金属変成と重ねあわせて寓意図で表現されるのはヘルメス哲学の常套である。「錬金術の役割が単なる金属変成に限られるならば……哲学的意味でもきわめて凡庸」である。『ヘルメス学の勝利』(Le triomphe hermétique)の著者リモン・ド・サン＝ディディエは、術師には「大地の中心で鉱物や金属の生成に関して、また地上で植物や動物の繁殖に関して自然が及ぼす作用を知悉」することが必要であるという。わずか一五枚の図に、それだけのものが記号化されているとすれば、その読み方はひととおりではありえない。

語彙の体系である錬金術は、また事に当たるものにとっては読み方の迷宮である。彼らの努力は「読み解く」ことに集中される。幾種類もの読み方が生産され、また読み方の読み方が際限なくうみだされる。

『ヘルメス学の勝利』もまた、サン＝ディディエが、一六〇四年にライプチヒで出

版された作者不詳の論考『騎士たちの古い戦い』に施した注釈である。刊行年は本書のどこにも記載されていないが、ユニバー・カンスリエの「序文」によって、一六八六年から八九年の間にそれが書かれたことを知ることができる。『騎士たちの古い戦い』は、対話体の形式をとって、黄金・水銀と賢者の石との口論を通じ、「哲学者の黄金と賢者の水銀」を胎内にかかえる賢者の石の卑俗の金・水銀に対する優越を説いたものである。サン＝ディディエの注釈も同じように師弟間の対話の形をとっている。冒頭「あなたはいろいろな著作家の書物を読むようにいつて」くれたという弟子に、師はあらためて「君はどんな書物を読んだか」と問いなおす。それに答えて弟子は、ヘルメス・トリスメギストスの「エメラルド板」にはじまり、フィラレテスにいたる書物と哲学者の長大なリストを示す。読書の重要性は対話を通じて師弟間でくり返されるが、そのとき彼らが、「私はたくさんさんの本を読み……化学の実験に精を出しました」「書物を読み実験する」、「賢者たちの書を慎重に読むこと、仕事は正確にやること」(この「仕事」は「実験」と考えてよいだろう)というように、読書—

実験という順序を定式化していることは注目に値する。というのは、たとえば Wayne Shumaker が『The Occult Science in the Renaissance』1972 でイタリヤの自然魔術師ボルタをとりあげ、彼が「時に実験を行なうこともあったが、全体として後向きであった」と、「実験」が「後向き」と背馳するかのようという誤りに、われわれを気づかせてくれるからである。ボルタ自身も「先人のいうことに耳をかたむけ」実験してみるといっているが、とりわけヘルメス哲学において実験は書物を読み解くための技術に他ならない。だからここでは本来実験は後向きなのである。

このことは、錬金術師の時間意識、歴史意識とかかわっている。死と再生の始源的なシンボルイズムと合致する錬金術の作業においては、時間が循環的、回帰的にとらえられるのはいうまでもない。それをサン＝ディディエは農耕における四季と対応させている。錬金術師にとって未来と過去は同一である。一方、もう一つの時間、不可逆的な悠久の時の流れを考えた場合、錬金術師のしごとは、数千年の自然の営みを、強引に実験室内で実現することであり、錬金術師にとっての未来は、炉に火が燃えつづ

けるたかだか数週間の未来でしかない。い
ずれにしても錬金術にとってそれ以上の未
来は空漠としている。近代科学と錬金術と
の相違は、継続的な研究によって世界のす
べての事象を「六冊の書物」に記録するこ
とができると考えた楽天的なフランシス・
ペイコンと、すでに書かれているはずの真
理を読み解こうとした術師の歴史観の差異
ではなかっただろうか。

(四六判 二四〇頁 一九七七年九月

白水社(ヘルメス叢書3 二二〇〇円)

(川島昭夫 京都大学大学院生)

『史林総目録』発刊のお知らせ

『史林』六〇巻記念事業として編集を進
めておりました総目録(六〇巻記念特別号)
を、昨年末に刊行いたしました。これは
『史林』第一巻〜第六〇巻の総目録で、巻
末には筆者名索引もついており、たいそう
便利かと存じます。定価は一〇〇〇円(送
料六〇円)です。会員以外で総目録をご入
用の方は、残部僅少となっておりますので
一〇六〇円(定価と送料)を添えて、なる
べく早く京都大学文学部内、史学研究会あ
て、お申し込み下さい。

◇送先 史学研究会

〒六〇六 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部内

『史林』投稿規定

本誌の投稿規定は次の通りです。

◇資格 本会会員であること

◇投稿受付原稿の種類、長さなど

○研究論文・研究ノート

四〇〇字詰五〇枚程度

研究論文には四〇〇字以内の「要約」
と、「英文要約」を添付のこと(研究

ノートには両方とも不用)

註は原則として各章末に入れること

○学会動向・批判と反省

四〇〇字詰三〇枚以内

○書評 四〇〇字詰二〇枚以内

○紹介 四〇〇字詰三枚程度

◇送先 史林編集委員会

〒六〇六 京都市左京区吉田本町

京都大学文学部内

編集後記

寒さきびしき今日この頃、会員の皆様には
いかがお過ごしでしょうか。

さて、『史林』六一巻二号をお届けいた
します。おかげをもちまして、本号も力作
を掲載することができました。年度末、御
多忙とは存じますが、御検討をお願い申し
上げます。

昨年末に刊行いたしました『史林総目
録』御一読いただけましたでしょうか。委
員一同の苦心の作でございます。ぜひとも
座右にお備え下さいませように。なお『総
目録』につきまして、お気付きの点ござ
いましたら、編集委員会までお知らせ下さ
い。(良)

一九七八年二月二五日印刷
一九七八年三月一日発行 定価七五〇円

史 林 (第六一巻第二号)

京都市左京区吉田本町
京都大学文学部

発行人 史 学 研 究 会

理事長 佐 藤 長

印刷所

京都市下京区七条御所ノ内町五〇
中村印刷株式会社